

平城宮第一次大極殿院の調査（平城第431次）

平城第431次調査は、第一次大極殿院南面築地回廊の発掘調査です。南面築地回廊に関しては、第41次調査（1967年）を皮切りとして、これまでに数度にわたる調査をおこなってきました。その結果、南面築地回廊が創建以来、東楼・西楼の増築を経て、奈良時代半ばまで存続したことが判明しています。今回の発掘調査は、第41次調査区と第77次調査区との間に残った未発掘区を対象としたもので、南面築地回廊における最後の調査となりました。調査面積は約630㎡です。調査は2008年4月1日にはじまり、6月26日に終了しました。以下、第431次調査の成果を簡単にまとめてみましょう。

これまでの調査により、南面築地回廊の基壇は版築工法で築成されたことが知られています。また、その東半部では基礎となる地面を一度掘り下げ、その内部から版築層を積み上げた掘込地業も判明しています。今回の調査でも、基壇下に掘込地業を施していることと、基壇が版築によって築かれた様子を再確認しました。

さて、この築地回廊の基壇ですが、その南側が水田の造成で大きく削りとられていたため、礎石の痕跡が失われた部分もあります。しかし、築地塀北側の柱列には礎石の根石がよく残っており、築地回廊の柱間を推定することができます。すなわち、桁行は約4.6m（15.5尺）等間、梁行は約3.6m（12.0尺）と復元され、南面築地回廊におけるこれまでの調査

成果と一致しています。しかしながら、基壇の上面が削り取られているため、築地塀の痕跡は完全に失われていました。

築地回廊にともなう遺構としては、雨落溝および石を詰めた溝を検出しました。回廊北縁の雨落溝は、礫混じり層の上面で回廊創建時のものを、灰色の砂利層の上面で回廊解体直前のものを見つけました。なお、創建時の雨落溝にほぼ接して石を詰めた溝があり、回廊付近の排水にかかわる暗渠の可能性があります。また、築地回廊の解体にかかわる遺構として、基壇外装の抜取溝も検出しました。

このほか、築地回廊の北側で大極殿院の広場の礫敷を検出しています。この礫は二度敷き直されたことが知られており、今回も下位から褐色の礫混じり層、黄褐色の砂利層、灰色の砂利層を確認しました。それぞれ下位から順に回廊の創建時、東楼増築時、還都後の礫敷に対応するでしょう。

以上、今回の調査成果は、次の通りです。

①第一次大極殿院南面築地回廊の基壇は、掘込地業を施したのち版築工法で築いていることを再確認しました。

②礎石の痕跡は、推定どおりの位置で見つかりました。また、基壇の南北縁では雨落溝などを検出しました。

③大極殿院内庭部では、創建以来、礫を二度敷き直していることを再確認しました。

（都城発掘調査部 森川 実）



第431次調査区全景（西から）



築地回廊の礎石痕跡（東から）